

大木になったお箸〈はし〉（西紀町）

西紀〈にしき〉町宮田に、一の宮というお社〈やしろ〉があります。

むかし、その参道に、二〈ふた〉かかえもある大きな杉の木が三本、ならんで立っていました。

「三本杉は、おらが村のたからじゃ。」

といて、村の人々は、たいへんしたしんでいました。

ある日の昼下りのころのことです。一人のお百姓が、阿弥陀淵〈あみだふち〉（今の宮田川）のほとりを通りかかりました。

ふと、下を見ると、誰か淵〈ふち〉におちて、溺〈おぼ〉れかかっているのが目に止まりました。

「あっ、たいへんだ。」

と叫んで、さっそく、淵にとび込み、やっとのことで、溺死寸前〈できしすんぜん〉の人を救いあげ、誰かと思って顔を見ると、

「あっ。」

と、思わず声をあげました。おどろくのも無理はありません。それは、近くの一の宮の神さんでした。

すぐ、手当をしたので、命は助かりました。

「一の宮さん、どうして、こんな所で。」

とききますと、

「実は、大きな鯉〈こい〉が目についたので、何とか、とりたいと思って、つい足をすべらしました。おかげさまで、助けていただいて。」

といて、何回も、頭を下げて、お礼をいわれました。

様子を見てみると、だいぶん、おなかすいているようなので、親切なお百姓は、自分の腰に下げている弁当を出して、分けてあげました。

「救っていただいたうえに、お弁当までご馳走〈ちそう〉になって、お礼のことばがありません。きっと、このご恩は、忘れません。ありがとうございます。ありがとうございます。」

といて、一の宮さんは、かえられました。お百姓はたいへんよい事をしたと、喜びながら、その弁当の箸〈はし〉を道のわきにさしておきました。

ふしぎな事に、その中の三本の箸から、根が下り、芽が出て、ぐんぐん大きくなり、とうとう、こんなに、大きな三本の杉になったということです。

